

当直激震「KOBEE」へ急げ

日本では自衛隊も消防もまだがれきの海に到着しないころ、スイスとフランスでKOBEEへ向けた動きが始まっていた。

スイスの首都ベルンから南東約二十五キロ。南にベルナー・アルプスのアイガーなど四千メートル級の峰々を眺める田舎町ルビガンは、厳しい冬の眠りの中に

あった。人口二千人足らず。スイス災害救助隊員のルネ・ブレッヒュブ(四四)は、自慢の口ひげの手入れをしながらテレビをつけた。大雪や地面凍結で、この季節は仕事にならない。勤務先の道路工事会社では、あと一週間の冬季休暇延長が決まっていた。

一月十六日午後十時(日本時間十七日



捜索犬による救助隊員訓練風景(フランス・ノール県、2月27日、辻田素子撮影)

スイス・フランス救援隊

午前六時、テレビが至急報で神戸での地震を知らせた。一時間後には、チューリヒの地震観測センターが動き始めた。スイス災害救助隊を統括する外務省「人道援助・災害救助局」に無線電話で一報を入れた。地震で神戸は大きな被害を受けた模様。当直責任者は、東京のスイス大使館に「情報は不足。援助を申し入れる方向で検討を」と指示した。

十七日午前一時(午前九時)、ニュースで死傷者多数が報じられた(日本の消防庁はまだ死者未計上)。だが、ルネのもとに救助隊本部から出動待機を知らせる無線電話はない。「日本は遠いなあ」。二日後、救援チームの一員として日本に飛び立つとは、思いもなかった。

夜が明け始めた。噴水、時計台、ゴシックの大寺院など中世の面影を残すベルン旧市街地のはずれ。四階建てビルの上階にある人道援助・災害救助局に約三十人のスタッフが集まった。

正面に縦二メートル、横三メートルの世界地図。全員の視線が「KOBEE」の一点に集まる。壁に四つの時計。左から午後二時(日本時間)、午前六時(国内時間)、午前五時(グリニッジ標準時)。右端は八時十四分を指す。地震発生からの経過時間である。

壁のホワイトボードにデータが記されていく。「マグニチュード7.2」「震源地

北緯三四・六度、東経一三五度」「神戸のJMA(日本気象庁)震度6」「JMA6はヨーロッパのMSK(12段階表示)に換算すると10だ。これは激震だ」。うめき声が上がった。「大惨事だ。疑いがない」。前後からの責任者が電話に飛びつき、「日本政府に援助を申し入れろ。ただちに」と叫んだ。

このころ、スイスからの列車が到着するバリのリヨン駅。快晴、氷点下〇・三度。駅の売店でのフィガロ紙の一面には「国立行政学院の存続賛成50%、反対25%」の大見出しが躍る。

再開発が進むパリ西郊外のルバロワ市。古びたビルにある内務省市民防衛局では、大災害に備えた常設の対策本部でジェーン・フレッド・クルジアル(四〇)らが日本へ派遣する災害救助隊の検討に入っていた。

出発するには、シャルル・ド・ゴール空港が最適。最も近いのは、パリ南四百四十キロ、人口三万人のノージャンにある部隊だ。空港まで車で約二時間。十部隊のうち圧倒的に近い。対策本部の方針は決まった。

ノージャン部隊の隊長バルラン・ミッシエル(四六)は、電話を取った。首を少し左に傾けるのがクセだ。

「もし、日本に行くことになったら、あなたの部隊です」。本部からの指示に、「リシュ・モン・キャプタン(承知しました)」。力強く答えた。六十人の隊員と四頭の救助犬の調子は万全だ。いつでも日本に行ける。